

「人間喜劇」における神と悪魔

中 村 加 津

I

Balzac を社会科学博士 (le docteur ès sciences sociales) と名付ける Bardèche が *Une Lecture de Balzac*¹⁾ の中で繰り返し述べているように、*La Comédie humaine* 中の作品はそのいずれの根底にも、確固とした常に変らぬ作者の思想が存在し、それが作品の物語としての面白さに力を与え、完全にしている。この思想は当然のことながら人間観、社会観となって現われることが最も多いのであるが、これがペシミスティックであるということは通説となっている。物語の殆んどが救いのない悲惨な結末に終るからである。ところで Balzac によって創造され、彼の思想に基づいてある運命を辿らせられる人物達を次のようにも二分することが出来る。この社会観を作者と共有している人物達と、そうではない人物達である。Balzac は評論家達に非難されるように²⁾、自分自身が作品の中で語り過ぎるのであるが、それでも彼の思想の殆んどは前者の群の人物達が代弁者となって語っている。勿論彼らはこの世界の中では少数派である。大多数をなす第二の群の人々が大抵の場合この世界の動きの主要素となっている。過剰な情熱を抱きこれに心身を食いつくされあわれな最期を遂げる Hulot, Goriot 等、情熱はちっぽけだが無智なために世間に食いものにされる Birotteau 兄弟等、主要人物は殆んどこの群に分類することが出来る。いわば彼らが Balzac の社会観を身をもって実証しているのだ。第一の群に分類出来る人々が Balzac と同じ炯眼でもってこれらの人々の悲惨な運命の原因を見抜き、その知識を彼ら自身の身を護る糧とし、或いはこれら哀れ

な人々を利用して自己の利益をはかる。彼らの特徴は、判断に決して誤りがなくその判断に基づいて失敗のない行動をとることのできる類いまれな能力を持っていることである。Balzac は人間に無限の能力があると信じていたかのようで、この意味ではむしろオプティミスティックであるとも言えそうである。尤も、これら超人の創造をロマンチック趣味の表われであると考えられることも出来る。Faguet は Balzac の中のロマンチズムを俗っぽい安びか物で、リアリズムを損うものだと決めつけているが、模倣ロマン派作家達に特有のものだと Faguet が言うところの奇想天外な盗賊や神秘主義の傾向を持った人物達とは、これら Balzac の代弁者と言える人物達のことをも指していると考えられる³⁾。万能の力を持っているのは神と悪魔である。Balzac の代弁者であり万能の力を持っている人物達もこの力を地上の世界での成功に利用する場合には悪魔のようであり、又ある人物達は専ら天上の世界にのみ憧れ、人間性を脱して神に近づく。Faguet が簡単に盗賊と神秘主義と片づけたものを、現代の評論家達はもっと重視し、例えば Castex は⁴⁾ Balzac においては幻想的な作品と現実的な作品とを切りはなして考えることは出来ないと言っている。これらロマンチックな描き方をされた人物の口から語られる思想こそが、*La Comédie Humaine* の世界にあれほどのリアリテをもたらしたのである。

ここではこのいわばロマンチズムとリアリズムの交錯点とでも言うべき人物達について考えてみたい。中でも、思想的な作品よりも風俗的な作品にあらわれた人物を扱う方がここでは適当である。何故なら、彼らのうちでも *Etudes philosophiques* に属する作品で扱われた人物達は、Balzac のリアリズムが最もその威力を発揮する *Etudes de Mœurs* の世界の、しかも Paris の生活とは隔離されている。彼らはよりよく Balzac の思想を代弁するためにわざとこの世界から取り出され、別の世界に置かれたようである。非現実性を最初から意図されている。一方、最も現実的な Paris の中で、Balzac の社会観を武器として勝利をおさめる超人的な人物が、Balzac のロマンチズムとリアリズムとの混淆をよりよく代表していると考えられる。このような人物の扱い方を具体的に作品を分析することにより色々な角度から見、Balzac の思想と創造との関係の一面を探りたいと思う。その目的のために最も適当な人物として、

Vautrin と名づけられた人物をとりあげる。

II

Le Père Goriot の中では Vautrin という名で、そして *Splendeurs et Misères des Courtisanes* の中では、Carlos Herrera という名で現われるこの人物は本名を Jacques Collin という脱獄囚である。いずれの作品でも若くて才能に恵まれ野心に満ちた、しかしながら世の中というものを全く知らない地方出身の美青年が、Paris に出て出世するための手助けを買って出る。Rastignac のいる madame Vauquer の下宿屋では気前のよい中年の商人を装い、Rubempré の保護者となった時には敬虔な高僧のふりをしている。しかしながらどちらの青年にも即座に全面的な信頼の念を呼び起こすというわけにはいかない。何故なら注意深い目から免れることの出来ない兇暴さが内に秘められているからである。事実、彼らを誘惑する Jacques Collin はまさに悪魔なのである。それは彼自身の言葉が証明する。彼は Rastignac に《Vous seriez une belle proie pour le diable⁵⁾.》と言い、又別のところでは、彼が Rastignac をはじめて見た時《[...] voilà un gaillard qui me va⁶⁾.》と思ったと告白する。Lucien と彼との出会いは次のように描かれている。《Ce voyageur ressemblait à un chasseur qui trouve une proie longtemps et inutilement cherchée⁷⁾.》ここでわれわれは、Melmoth を思い出さざるを得ない。Collin が一獲千金を必要とする野心に満ちた青年を求めると同じように Melmoth もどうしても大金を必要とする獲物を探す。凡庸な会計係 Castanier が身の程知らずの犯罪を犯したその現場に悪魔は現われ、執拗に追って誘惑する。契約を結んだ Castanier は Lucien が Collin の目を借りて全てを見、正しく判断出来るのと同じように、万能の力を得、もはや法を犯す必要なしに目的に達することが出来る。《Qui donc est assez fort pour me résister? lui dit l'Anglais. Ne sais-tu pas que tout ici-bas doit m'obéir, que je puis tout? Je lis dans les cœurs, je vois l'avenir, je sais le passé. Je suis ici, et je puis être ailleurs! Je ne dépends ni du temps, ni de l'espace, ni de la distance. Le monde est mon serviteur.》⁸⁾ この Melmoth の能力を

Castanier がそっくり受け継ぐのである。Vautrin が Rastignac に与えようとするのも、Herrera が Rubempré に与えたのもこれと同じ透視力、知力と世界を征服出来る力である。観念的に描かれた Melmoth の姿を現実世界に置いたのが Jacques Collin という人物であると言うことが出来るだろう。Rastignac は Vautrin の手を借りずに力を発揮できる能力と才気と好運を持っていたのに反して、Rubempré は Castanier と同じように意志の力を持たなかったために悪魔と契約を結ばざるを得ない破目に陥入った。

さて、先に Vautrin を Balzac の代弁者に分類したが、実は彼はこのような悪魔だったのである。しかし彼は又確かに代弁者である。安土正夫氏によれば Vautrin という人物の創造は「Balzac に本質的に内在する反社会的なアナキックな傾向⁹⁾」を証明するものである。Balzac が Vautrin の考えを否定していないことは、世間に目を開いた Rastignac をして《Il ne s'y commet que des crimes mesquins! [...] Vautrin est plus grand.》¹⁰⁾ と遂に言わしめていることでもわかる。又、代表的な社交界の貴夫人であり秀れた女性である madame de Beauséant や、婦女の鑑と Balzac が讃える madame de Mortsauf にも、それぞれの言いまわしで結局は Vautrin と類似の処生術を述べさせてもいる。熱意や情を見せず、冷酷な打算に基づいて行動することによってのみ世の中で成功出来るというのである。Vautrin と同じように社会の原理よりは存在を重んじる madame de Mortsauf は次のように Felix に教訓する。《[...] ce qui me semble certain, est leur existence. [...] La société d'aujourd'hui se sert-elle plus de l'homme qu'elle ne lui profite? je le crois ¹¹⁾》。これは Carlos Herrera の次の言葉と同じ内容である。《C'est qu'aujourd'hui, jeune homme, la Société s'est insensiblement arrogé tant de droits sur les individus, que l'individu se trouve obligé de combattre la Société.》¹²⁾ 戦いに勝つためにはどうすればよいか。先ずはルールを守ることである。《Quand vous vous asseyez à une table de bouillote, en discutez-vous les conditions? Les règles sont là, vous les acceptez¹³⁾。》と Carlos Herrera は言い、madame de Mortsauf は、

《Selon moi, vous devez donc obéir en toute chose à la loi générale, sans la discuter, qu'elle blesse ou flatte votre intérêt¹⁴⁾.》と言う。何故なら、《Mais la société, plus marâtre que mère, adore les enfants qui flattent sa vanité¹⁵⁾.》 Félix も、Herrera に教育された Lucien も、共に冷静な、情を見せない態度を貫き、そのために成功するのである。madame de Mortsauf は天使的存在である Séraphita と常に同列におかれている¹⁶⁾。悪魔である Melmoth との類似点が多岐に及ぶ Jacques Collin と、天使のような女性にこのような共通点があることをどう解釈すべきだろうか。この悪魔的存在 Jacques Collin の特性について更に考えを進めてみたい。

脱獄囚 Jacques Collin という人物の特質として見落としてはならない今一つの大きな特徴は父性愛である。安土正夫氏によれば、この人物の前身として Ferragus を考えることが出来る¹⁷⁾が、Ferragus の大きな特徴は Goriot 的父性愛である。Jacques Collin にとっての父性愛はどのような意味を持つだろうか。

Vautrin が Rastignac を誘惑する場合には、愛情よりはむしろ打算が働いている。彼はこの若者と取引しようというのである。Vautrin 自らは手を下さずに mademoiselle de Taillefer の弟を首尾よく殺させる。一方 Rastignac がこの娘をうまく誘惑して結婚にまでもちこみ、多額の持参金を自由にすることが出来れば、その一部を自分のものにしたいというのである。この中年男の若者に対する態度は、時には強引で荒っぽい。計画遂行を妨げようとしているらしいと思うと睡眠薬を飲ませたりする。しかし、逮捕され獷猛な正体を暴露した時にも、この若者にだけは特に優しい微笑を投げかける。又、他の場合でも彼の Rastignac に対する態度の描写に paternel という表現が多く使われている。次の彼の言葉も、打算ばかりから発せられたとは言い難い。

《[...] je suis un bonhomme qui veut se croquer pour que vous soyez à l'abri de la boue pour le reste de vos jours. [...] Si je deviens riche, je vous aiderai. Si je n'ai pas d'enfants [...] je vous léguerais ma fortune. Est-ce être l'ami d'un homme? Mais je vous aime, moi. J'ai la passion de me dévouer pour un autre¹⁸⁾.》このような彼の感情が更に

発展させられるのは、*Splendeurs et misères des courtisanes* においてである。彼が Lucien を誘惑する仕方は Melmoth が餌食を求めるのと似てはいるが只一点で大きく違っている。愛情が働くという点である。この愛情は単なる同性愛的偏執か、自己の果せない望みを代りに果してほしいという利己的な動機に基づくものか、或いは純粹に無私の献身的なものか、これらのいずれであろうか。いずれであるとも言える。女を決して近づけず、美しい女の誘惑にも心を動かすことなしに愛情の対象としてはより抜きの有能な美青年を選ぶという点では、同性愛と考えられる。只、行動家であり、飽くことなき征服欲、権力欲に燃えている彼は、その愛情の対象を権力の地位に着かせることにのみ専心する。この意味では不健康な同性愛的なところは微塵もなく、それよりも息子の出世を一心に願う甘い父親の要素が多い。Lucien と Esther の間の愛情がいかにも深いものかを知って苦い思いをするのは嫉妬ともとれるが、それよりも Lucien に関する彼の計画の邪魔をするものが出来たことを残念がっている傾向が強い。そして Esther を邪魔者としてではなく踏み台として利用する方法を考える。Herrera と Lucien との結びつきには Vautrin と Rastignac の場合のような明らかな利害関係はあるだろうか。《A eux deux, Lucien et Herrera formaient un politique¹⁹⁾.》才能はあるが実行力の欠除しているために人生の門出に失敗した Lucien に、その実行力となってもう一度野心を遂げさせようとするのが Herrera である。Herrera の側から言えば、脱獄囚という身分のために常に身を穩して生きなければならず、しかもそのたくましい生命力が要求する魂の渴を癒すためには Lucien が最も適当な道具である。彼はいわば Lucien という皮を被り、Lucien の肉体の中に入って自身では果せぬ野心を遂げようとするのである。《Carlos était ambitieux pour deux²⁰⁾ [...]》。利害関係と言えは以上である。しかしながら世間の目に Lucien を Herrera の落とし種だと信じさせているのはあながち便宜の為ばかりではない。Rastignac に語った、自己を滅して献身したいという欲望は Lucien に向って十分に発揮されている。Lucien の為には自らの身をどのように汚すことも嫌わない。《Tu veux briller, je te dirige dans la voie du pouvoir, je baise des mains bien sales pour te faire avancer, et tu avanceras²¹⁾.》

Herrera は Lucien にとって、Melmoth が Castanier に対するような恐ろしいものではない。彼のどんな望みも叶えてくれる甘い父親である。彼が誘惑を始める時から既に悪魔的誘惑のみではないことが感じられる。《[...] je suis seul, je vis seul.[...] J'aime à me dévouer, j'ai ce vice-là.[...] Je veux aimer ma créature, la façonner, la pétrir à mon usage, afin de l'aimer comme un père aime son enfant. Je roulerai dans ton tilbury, mon garçon, je me réjouirai de tes succès auprès des femmes, je dirai : «Ce beau jeune homme, c'est moi ! ce marquis de Rubempré, je l'ai créé et mis à un monde aristocratique ; sa grandeur est mon œuvre, il se tait ou parle à ma voix, il me consulte en tout²²⁾.» このような Carlos Herrera の望みは叶えられ、そして Lucien が司法の手により自殺にまで追いつめられた時にこの父性愛は最高度にその姿を現わす。《Oh ! mon fils ! [...] Puis-je le voir de mes yeux ? demanda timidement Jacques Collin ; laissez-vous un père libre d'aller pleurer son fils ? [...] Si vous avez des enfants, messieurs, dit Jacques Collin, vous comprendrez mon imbécillité, j'y vois à peine clair... Ce coup est pour moi bien plus que la mort, mais vous ne pouvez pas savoir ce que je dis ... Vous n'êtes père, si vous l'êtes, que d'une manière ;... je suis mère, aussi ! ... Je... je suis fou... je le sens²³⁾.》看守や医師、死体運搬人等、どんなに恐ろしい情景にも心を動かすことのなくなった人々さえも、Jacques Collin の悲しみを前にしては足を止めずにはおれない。三度の牢獄暮らし、三度の脱走により鍛えられた神経と、全てを見抜きすばやく断固たる決意をし実行に移すことの出来る鋼鉄のような人物が、軟化した金属のようになったのである。そしてこの僧侶が、脱獄囚 Jacques Collin と同一人物であるという証拠を掴みたいと必死になっている警察側の罠に危くかかりそうになる。全く彼らしさを失ない、はじめて心に隙が出来るのである。検事長も彼のこのような心情の吐露にはついほろりとしてしまう。恐ろしい程の権力欲を除いては Jacques Collin という人物は考えられないのと同じように、父性愛も又彼の存在の根本的な要素となっている。この父性愛が権力欲と常にからみ合っている。権力

欲が原動力となっている彼の生き方は悪魔的である。彼の力強さ、万能は悪魔のそれと同じである。しかしこれとからみ合った父性愛にはもはや悪魔的なところは微塵もない。むしろ彼の次のような論理を適用すれば、それは人間を神の域にまで高めるものであるとも考えられる。

«[...] je ne vis que par les sentiments. Un sentiment, n'est-ce pas le monde dans une pensée? Voyez le père Goriot: ses deux filles sont pour lui tout l'univers, elles sont le fil avec lequel il se dirige dans la création. Eh! bien, pour moi qui ai bien creusé la vie, il n'existe qu'un seul sentiment réel, une amitié d'homme à homme²⁴.» この友情は彼を若者に結びつけるものであり、牢獄では Théodore というコルシカ生まれの美青年、貴族社会では Lucien と、いずれの場合にも Goriot の娘達に対する愛情にも匹敵する強いものである。この感情は Goriot と同じく彼を神聖にするものだということになる。彼の、お気に入りの青年に対する教育熱は、完全な人間を作りたいという創造意欲の表われであり、その動機には愛情があるのみで、神の所業にも比すべきものであると解釈出来ないだろうか。

この悪魔性と神性とのからみ合いを Balzac がどのように扱ったかを考察するについて、Vautrin という人物の最期をとりあげたい。彼はその魔性を罰せられて不幸な最期を遂げるのではない。 *La dernière incarnation de Vautrin* は彼が遂に平和な晩年を迎えるらしいことを暗示している。Melmoth は神と和解する。魔性を脱ぎ捨てることによってである。愛する若者の死によって父性愛の苦しみを最高度に受けた Jacques Collin も、それまでの反抗的生活から脱して法の番人の側にまわる。いわば社会との和解である。Melmoth の場合と同一の意味が持たせられているのだろうか。

Melmoth は次のような事情で神と和解する。《En puisant à pleines mains dans le trésor des voluptés humaines dont la clef lui avait été remise par le Démon, il en atteignit promptement le fond. [...] L'inanité de la nature humaine fut soudain révélée à son successeur, auquel la suprême puissance apporta le néant pour dot. [...] Mais la seule chose que lui refusait le monde, c'était la foi, la prière, ces deux

onctueuses et consolantes amours. [...] Il sentit en dedans de lui quelque chose d'immense que la terre ne satisfaisait plus. [...] Il se sentit à l'étroit sur la terre, car son infernale puissance le faisait assister au spectacle de la création dont il entrevoyait les causes et la fin. En se voyant exclus de ce que les hommes ont nommé le ciel dans tous leurs langages, il ne pouvait plus penser qu'au ciel²⁵⁾.»

こうして Castanier は彼の前任者のところへ行く。この虚しい万能の力を Castanier に肩がわりさせることに成功した者は、悪魔の力を持つものに与えられない唯一のもの、信仰、を持つことが出来たのである。彼は既に神の至福を得、「天使達もお喜びになったにちがいない」²⁶⁾ような死に方をしている。心を動かされた Castanier は只ひたすらに後任者を探す。株式取引所で且ての彼のように絶望的な状態にある相場師を見つけ、悪魔の資格を譲る。かくてこの不吉な能力は人手から人手へと渡り、Peau de chagrin のようにだんだんと小さくなってついに消滅する。

さて、寓話的作品 *Melmoth réconcilié* が Jacques Collin の末路を象徴的に示していると考えられようか。Castanier が真の Satan ではなかったのでその能力を重荷と感じたのと同じように Lucien の自殺を考えることも出来る。Jacques Collin はどうか。彼も Melmoth のように神と和解したのだろうか。検事長 Granville のところへ本名で名のり出た Jacques Collin の次のような言葉は、Lucien の死によって受けた打撃で彼本来の闘争心を失ってしまったかの感を与える。

«Monsieur! monsieur! on enterre en ce moment ma vie, ma beauté, ma vertu, ma conscience, toute ma force! Figurez-vous un chien à qui un chimiste soutire le sang... Me voilà! je suis ce chien... Voilà pourquoi je suis venu vous dire: «Je suis Jacques Collin, je me rends!...» J'avais résolu cela ce matin quand on est venu m'arracher ce corps que je baisais comme un insensé, comme une mère, comme la Vierge a dû baiser Jésus au tombeau... Je voulais me mettre au service de la Justice sans conditions...²⁷⁾»

又、次のような彼の言葉は、力つきたことを示しているようである。

《Cette nuit, en tenant dans ma main la main glacée de ce jeune mort, je me suis promis à moi-même de renoncer à la lutte insensée que je soutiens depuis vingt ans contre la société tout entière.[...] Jacques Collin est en ce moment enterré, monsieur de Granville, avec Lucien, sur qui l'on jette actuellement de l'eau bénite et qui part pour le Père-Lachaise. Mais il me faut une place où aller, non pas y vivre, mais y mourir...²⁸⁾》この言葉が満更芝居気ばかりから発せられたのではないことは、彼の苦しみが真実であったことからみても明らかである。しかしながら又同時に、彼が検事長と取り引きをしているのだということも忘れてはならない。ひとつには彼のもうひとりのいとこ子 Théodore の減刑、今ひとつには彼自身の身柄を高く売りつけるためにである。事実彼が叔母に向かって言う言葉²⁹⁾には、決して素直に屈服しているのではなく、それどころか更に勝利を得るために屈服しているふりをしているだけだということがよく表われている。彼の考えによれば法を司るということは社会に復讐することである。検事長に向かってこう言っている。《Vous vengez tous les jours ou vous croyez venger la société³⁰⁾.》*Le Père Goriot* で副主題であった Jacques Collin と国家権力との闘争が、*Splendeurs et Misères des Courtisanes* では主題となっている。犯罪者の王である Collin と、国家権力の手先で彼に匹敵する能力を持った Corentin との腕の競い合いである。飽くことなき両者の騙し合いののち、互いに相手の腕を尊重し合い刀を収めて戦を終えている。決して Jacques Collin の側の一方的敗北ではない。彼は法の番人となってそれまでして来たことの仕上げをするのである。更に長い間得られなかった平穩を得て晩年を迎えているらしい。完全な勝利である。このようにこの作者は、Melmoth の力を消滅させたようには Vautrin の力を扱ってはいないのである。

III

以上、法の埒外に生きる Jacques Collin という人物が非常に多くの悪魔的要素を持ちながら、一方では神性の域にまで達し得る素質を持ち、その破壊的

社会観も多くの点で Balzac 自身の思想を代弁するものであって、この思想に基づいた生き方により *La Comédie Humaine* の世界での数少ない勝利者になっていることを見て来た。このように強大な力を持ち正義派の悪漢とでも言うべき人物は、Byron, Schiller 等によっても描かれたロマン派の寵児である。この時代に特に俗受けしたことは、Balzac が1840年頃の経済的苦境を脱却する為に芝居で大儲けしようと思いついた時、その題材として Vautrin を取り上げたことから見てもわかる。芝居 *Vautrin* は彼の借金返済の鍵を握っていたのである³¹⁾。

ところでこのような人物の創造は単に Balzac が時代のロマン主義的傾向に迎合したためだけであるとは決して言えない。超自然的な能力への憧れは早くから彼の内部に巣喰っていた。彼の思想的成長の根本にそれは終始内在していたのである。しかも、彼における特徴はその超自然的な能力が時には天国のものであり、時には地獄のものであったということである。幼少の頃からの天への憧れは自伝的要素の強い作品 *Le Lys dans la Vallée* や *Louis Lambert* においてうかがうことが出来るが、又、全宇宙を知識で征服しようという強い野心が悪魔的全能への興味へと向ったことは、初期の作品の主題が殆んどこのようなものであったことから十分うかがうことが出来る。《D'abord, l'expérience mystique a toujours répondu, chez Balzac, non seulement à un besoin d'amour et de pureté, mais à une ambition de puissance et de connaissance; il y voit, comme la plupart des gnostiques, une conquête autant qu'une révélation³²⁾.》Balzac のこのような傾向を Philippe Bertault が「二元論」のあらわれであると言うのに反論して Castex は、このいずれもが Balzac の只一つの欲求、人間を超越したいという欲求のあらわれであり、天使の保護を得るか悪魔の旗印の下に走るかは Balzac にとっては大した違いがなかったのだと述べている³³⁾。この考えが正しいことは、*Séraphita* という天使的存在の前身と Balzac が称した、*Louis Lambert* という人物の創造を見れば特にはっきりとする。彼の能力は、*Melmoth* や *Vautrin* のものと同じような表現で描かれている。《[...] Louis embrassait les faits, il les expliquait après en avoir recherché tout à la fois le

principe et la fin avec une perspicacité de sauvage³⁴⁾.》知力ばかりではなく腕力でも彼はそのひ弱な体格にも似ない超人的な力を発揮することが出来るのである。しかし何よりも、一切を見、知ることの出来る透視力が彼の特徴であり、Castanier と同じく、この能力のために虚無感に悩むことになる。Pauline への恋文に悪魔が彼に虚無を見させてしまうことを訴えている。このような Louis Lambert が同時に彼岸の世界への憧れを抱き、それに達するための殉教者の苦しみのある生活をしているのである。彼が天に向う動機については何ら説明がされていない。Vautrin に万能と父性愛が共存するのと全く同じように、Lambert に神秘宗教的傾向が存在すると考えられる。Vautrin の生涯は勝利で終るかの如く、そして Lambert のは敗北で終るかの如くみえる。Castex は彼の天折を天使への憧れと知識による征服への渴望という二重の欲求による消耗だと解釈している³⁵⁾。Balzac が果してそのように意図してこの結末を書いたのだろうか。Louis の処女妻である Pauline は彼の狂気を狂気とは考えていない。《Sans doute, me dit-elle, Louis doit paraître fou; mais il ne l'est pas, [...] Il a réussi à se dégager de son corps, et nous aperçoit sous une autre forme, je ne sais laquelle. [...] Peut-être un jour Louis reviendra-t-il à cette vie dans laquelle nous végétons; mais s'il respire l'air des cieux avant le temps où il nous sera permis d'y exister, pourquoi souhaiterions-nous de le revoir parmi nous? ³⁶⁾》尋常の人間には許されないこと、この身をこの世に置きながら天国へ入るということを、この超人 Louis は成し遂げたのである。Vautrin の地上での成功と同じような天上での成功と解釈すべきではないだろうか。

天国と地獄とが Balzac においては全く混然一体となっていた。勿論悪魔よりは神を求めようとしたには違いない。観念的もしくは幻想的な作品と言える、現実を描くことを意図していないものの最後の作品である *Melmoth réconcilié* において、一応悪魔の力を縮少し消滅させていることからそれをうかがうことが出来る。しかしながらこの作品での力の消滅の過程の描写は何と迫力に乏しいことだろう。Castanier が悪魔に誘惑される部分は、この非現実的な事柄を現実だと読者に納得させうるだけの十分な力を持っている。読者はこの作品

の中に、お伽噺を読む時のあの作者との約束なしに、現実的な物語を読む時と同じ状態で入ってゆくことができる。Castanier という人物の設定、罪を犯す必然性、Melmoth 出現の現実性などお膳立ては完璧で、どのような読者も現実の世界から非現実の世界へと実に容易に引きずりこまれる。作家としては円熟期に入った Balzac の手腕をあますところなく見せているのである。ところがこの悪魔的能力の所持者が神と和解するこの作品の後半には、前半のようなリアリテはない。全く観念的に述べられているのみである。現実的な肉付けがなく、従って説得力も弱い。この事実、更に又1835年に完成したこの作品以後 Balzac の作家生活は10年以上も続くわけであるが、その間には現実生活に題材を求める作品ばかり書いていることに注目したい。Vautrin の口から発せられる社会観を、いわば実証するような作品ばかりである。Balzac は Louis Lambert のように天上での生活を求めていたかもしれないが、現実の生活では Vautrin のような能力が要求され、又、彼自身の素質として Castanier が Melmoth から受け継いだ能力への憧れを抑えることが出来なかったのではないだろうか。

それでは天国と地獄のいずれが Balzac に、より多くの実りをもたらしたのだろうか。彼は madame Hanska に、Goriot は毎日作ることが出来るけれども *Séraphita* は生涯に一回しか出来ないと云っている³⁷⁾。この種の作品は常に非常に多くの労を作者に費やさせたことは、Louis Lambert, *Le Lys dans la Vallée*, *Le Médecin de Campagne* などとともに *Séraphita* という題名も彼の書簡に幾度もあらわれているのに反して Goriot 等の創作の苦労にはあまりふれられていないことからわかる。作者は宗教的な題材の作品をそうではないものより重視していたらしい。しかし出来上がった作品はどうか。Goriot は *Séraphita* に比して単に俗受けする点で秀れているにすぎないのだろうか。天国よりも地獄を描いたものの方が Balzac にとって労少なくして功が大きかったと思われる。地獄からの方が遥かに多くの実りを得ている。しかも Vautrin においてのように、彼はどうしても地獄を地獄として否定し切ることは出来なかった。そして天上に行くことを得た Louis Lambert によっても、Vautrin の方にずっと豊かな人間性を与え生き生きとした生命を与えることが出来た。

Vautrin の創作は滑稽な奇想天外であろうか. 或いは俗っぽいロマンチズムであろうか. このロマン派的人物は非常に現実的である. 作家の腕前とは, いかにかに真実らしく創作出来るかにかかっているとすれば, 最も非現実的なものを最も現実らしく見せる能力が, 作家として最高の腕前であると言えよう. 奇想天外な人物 Vautrin にあれほどの現実的な厚味を持たせた点で, Balzac はロマンチズム, レアリズムの区別を超越した作家の偉大さを見せているのではなからうか. 更に Vautrin が登場するこれらの作品を物語として面白くしているものは何か. 彼の悪魔性, 神性のみではない. 彼の万能の力すらたちうち出来なかったものがある. 偶然のいたずらである. *Le Père Goriot* でも *Splendeurs et Misères des Courtisanes* でも, 大団円を導くものはいずれかの登場人物の能力ではない. 運命のいたずらである. 目的に向かって進む Vautrin なり Herrera なりと, これを捕えようとする Coentin との動きが同時に進むにつれ, 両者の予期せぬ事態が彼らの行動を原因として必然的に持ち上がる. そこに物語としての最大の面白さがある. Collin 自身も言っている. «[...] j'ai reconnu qu'il y a dans la marche des choses une force que vous nommez la Providence, que j'appelais le hasard, que mes compagnons appellent la chance⁸⁸⁾.» この力が Balzac の世界に, 彼の求める神の力, 悪魔の力を乗り越えて君臨しているのである. そしてこれこそが, Balzac を真の物語作家たらしめているものである. 彼を細かい流派を乗り越えたホメロス以来の伝統を引く古典的な作家たらしめているものである. この力を彼の作品に注ぎ込んだものは何か. 彼が神秘宗教の方法で求める神ではなくいつのまにか彼に創作のペンをとらせている芸術の女神ではなからうか. 彼の作品世界に君臨し, 彼に最も大きな恵みをたれたのはほかならぬ芸術の女神ではないだろうか.

注

テキストとして *Œuvres complètes de Honoré de Balzac*, édition Louis Conard を使った. 注では便宜上この叢書を略語で Œ と記した.

1) Maurice Bardèche : *Une lecture de Balzac*, Les Sept Couleurs, 1964.

2) 例えば Albert Thibaudet は *Réflexions sur le Roman* (Gallimard) にお

いて《Il y a très peu de romans de Balzac qui n'aient poussé au noir, c'est-à-dire où tantôt les péripéties feuilletonnesques, tantôt les commentaires filandreux ne remontent embarrasser et assombrir les figures.》(p. 24) と述べている。又 Émile Faguet は *Balzac* (Hachette, 1913) において《Un romancier comme un poète épique [...] ne doit penser que par le cerveau de ses personnages et ne doit exprimer ses pensées que par leur bouche. [...] cette loi qu'il (Balzac) connaît, il l'oublie souvent.》(p. 70) と述べている。

3) *ibid.* p.136, p.129.

4) Pierre-Georges Castex : *Le Conte Fantastique en France de Nodier à Maupassant*, José Corti, 1962.

5) Œ. VI, p.387.

6) Œ. VI, p.331.

7) Œ. XII, p.530.

8) Œ. XXVII, p.343.

9) 安土正夫『バルザック研究』東京創元社, 昭35, p.340.

10) Œ. VI, p.480.

11) Œ. XXVI, p.148.

12) Œ. XII, p.546.

13) *ibid.* p.545.

14) Œ. XXVI, p.148.

15) *ibid.* p.152 sq.

16) Lettre à madame Hanska, le 11 mars 1835.《Ce (*Le Lys dans la vallée*) sera, sous la forme purement humaine, la perfection terrestre, comme *Séraphita* sera la perfection céleste.》*Lettres à l'étrangère*, Calmann-Lévy, I, p. 237.

Lettre à Marquise de Castries, vers le 10 mars 1835.

《Cette œuvre (*Le Lys dans la vallée*) sera la dernière scène des *Etudes de mœurs* comme *Séraphita* est la dernière *Etude philosophique*.》*Correspondance*, Garnier, t.II, p.655 sq.

17) 安土正夫, *op. cit.*, p.340.

18) Œ. VI, p.388.

19) Œ. XV, p.57.

20) *ibid.* p.58.

21) *ibid.* p.62.

22) Œ. XII, p.553.

23) Œ. XVI, p.151 sq.

24) Œ. VI, p.389.

25) Œ. XXVII, p.356 sq.

- 26) *ibid.* p.360 «[...] qui a dû réjouir les anges.»
- 27) Œ. XVI, p.252 sq.
- 28) *ibid.* p.281 sq.
- 29) *ibid.* p.269, «Je vengerai Lucien»; p.293, «Je ne vis que pour me venger de lui.»
- 30) *ibid.* p.251.
- 31) voir *Lettres à l'étrangère*, I, p.525.
- 32) Castex, *op. cit.*, p.171.
- 33) *ibid.* p.172.
- 34) Œ. XXXI, p.47.
- 35) Castex, *op. cit.*, p.202 sq.
- 36) Œ. XXXI, p.161 sq.
- 37) *Lettres à l'étrangère*, I, p.238.
- 38) Œ. XVI, p.281.

(F. 33. 金蘭短期大学非常勤講師)